

# 視点と物語る声の並存表現について

## On the Coexisting Expression of Point of View and Narrative Voice

山 岡 實

### 1 序

物語談話において、次の(1)～(4)に見られるような言語形式（(1)進行形を含む文、(2)倒置構文、(3)分詞構文を伴う文、(4)自由間接話法の文）が、しばしば、用いられる。

- (1) Poirot came up and stood beside him. Linnet Doyle was lying on her side.<sup>1)</sup>
- (2) Ulysses squirmed, got down, and then ran for home, not disappointed, only eager to tell someone. Now, out of his store, stepped Ara himself.
- (3) He rushed to the porch and saw nothing but the ink-black storm. Then a bolt of lightning sliced the sky, briefly illuminating the driveway.
- (4) Liking him she opened the door and looked out. . . . The cat would be a-round to the right.

この小論では、物語談話（特に、三人称物語）に生起するこれらの言語形式が、どのような伝達様式による表現形式であるかを、拙稿（1989 a・b）に倣って、物語談話の構成に<sup>2)</sup>関与する二つの概念、視点（point of view）と物語る声（narrative voice）を考慮に入<sup>3)</sup>れ、具体的実例に即しながら考えてみる。さらに、その結果から、これらの言語形式が、英語の三人称物語において、どのような意味をもつ表現形式であるかを考えてみる。

### 2 個々の言語形式の伝達様式

ここでは、具体的実例に即して、(1)–(4)の言語形式が典型的に現れる文脈を可能な限り吟味しながら、個々の言語形式が、どのような伝達様式による表現形式であるかを考えてみる。

## 2.1 進行形を含む文の場合

- (5) Poirot came up and stood beside him. Linnet Doyle was lying on her side.  
Her attitude was natural and peaceful. (Christie<sub>1</sub> : 103)

最初の文では、語り手により、登場人物 Poirot の行為の客観的描写が行われている。そして、次の二つの文では、語り手は登場人物 Poirot の視点に入り込み、Poirot が意識の主体となっている場面が示されている。したがって、問題の進行形には、意識の主体である Poirot が Linnet Doyle の死体をじっと眺めて検視している意識を感知することができる。尚、三番目の文では、Poirot が Linnet Doyle の死体を検視した後のコメントが示されている。

- (6) “Nick,” someone said softly, almost whispering. Nick swiveled his head.  
Linda was standing at the corner of the trailers. (Corder : 43)

Nick は、聞き覚えのある呼び掛けに、「はっ」と思って振り返る。すると、その声のした場所には、いるはずのない Linda が立っている、という脈絡である。この場合も、事例(5)と同じように、問題の進行形は、登場人物の視点が支配する場面に生起していて、進行形には、意識の主体である Nick が、なぜ、今頃こんな場所に Linda がいるのだろうかと思惑に思っ<sup>5)</sup>て注視している意識を読み取ることができる。

このように、ここでの進行形は、意識の主体である登場人物がある対象を今まさに目の当たり<sup>5)</sup>に知覚している意識を反映し、進行形を含む文全体では、登場人物の目から今まさに<sup>6)</sup>見ている出来事が示されている。が、進行形の be 動詞には、事例(5)と(6)、共に、was という語り手の時制である過去時制が用いられている点に語り手の声が聞こえ、語り手の存在を感知することができる。したがって、この場合、ある出来事を知覚している観点は登場人物にあり、その登場人物の視点から今まさに知覚している出来事が伝えられるが、その知覚している出来事を語っているのは、語り手であるということになる。

が、次のような事例(7)を見てみよう。

- (7) When he had finished the first bottle of beer he ordered another. . . The doors of the bus opened but Elaine shook her head at the driver and then the doors closed and the bus moved on. The waitress was standing beside his table. (Webb : 124)

この場合、二番目以降の文 (The doors of the bus opened ...) では、語り手は登場人物 he (Benjamin) の視点に入り込み、he が意識の主体となっている場面が描かれている。登場人物 he は、バスが来て、Elaine がどうするのかと去就を窺っていると、バスだけが行ってしまった。その時、目をレストランの中に転じると、waitress が自分の前に立っている、という脈絡である。したがって、この場合、進行形には、意識の主体である he が、一瞬はっとして、なぜ、その waitress がそこに立っているのかと不思議に思いながら視線を注いでいる意識を感知することができる。この点では、事例(5)および(6)の場合と全く同じであるが、ただ、意識の主体である登場人物を指示する場合、三人称代名詞 his を用いて客観的に対象化している点にどうしても語り手の声を払拭することができず、事例(5)および(6)の場合と異なって、語り手が登場人物の視点に完全に移入仕切っていないことがわかる。

## 2.2 倒置構文の場合

- (8) Having seen the green apricot, Ulysses squirmed, got down, and then ran for home, not disappointed, only eager to tell someone. Now, out of his store, stepped Ara himself. (Saroyan : 121)

登場人物 Ulysses は、緑色のあんずを見たその感激を誰かに伝えたいと思い、家に向かって走っている。すると、Ara の店から人が出てきた。その人物は誰かと思っていると、店主の Ara 自身であった、という脈絡である。この場合、倒置構文では、語り手は登場人物 Ulysses の視点に移入し、Ulysses が意識の主体となり、その意識の主体である Ulysses が、Ara の店から出てきた人物を知覚し、その人物が Ara 自身であることがわかった、ということが示されている。

- (9) And Bob suddenly was very scared. For during the past weeks all the arrangements had occupied his mind to the exclusion of emotion... The double doors now parted. Out came the flight crew, jabbering about the fantastic roast beef at Durgin-Park. (Segal : 36)

登場人物 Bob は、庶子の Jean-Claude が税関から出てくるのを今か今かと待っている。やっと、税関の両開きドアが開き、そこから人が出てくる。そこから出てきた人物は、飛行機の乗務員で、何やら早口でロースト・ビーフのことをしゃべっている、という脈絡である。この倒置構文でも、事例(8)と同じように、語り手は姿を消し、意識の主体であ

る Bob が、税関のドアから出てきた人物を知覚し、その人物が飛行機の乗務員であることがわかった、ということが表されている。<sup>8)</sup>

そうすると、ここでの倒置構文は、知覚者（意識の主体である登場人物）がある場所から出現した対象を知覚して同定化する、という今まさに進行している認識過程を反映していることがわかる。<sup>9)</sup>が、ここでも、倒置構文の動詞は、語り手の時制である過去時制（stepped・came）が用いられている点に注目しなければならない。したがって、この場合、対象を知覚して同定化している基点は登場人物にあり、その登場人物の視点から今まさに進行している認識過程が伝えられるが、その認識過程を語っているのは、語り手であるということがわかる。

## 2.3 分詞構文を伴う文の場合

分詞構文と言っても様々な用法があるが、ここでは、(i)「継起性」を示す X, Y ing 構文の場合、(ii)「時」を示す X ing, Y 構文の場合、(iii)懸垂分詞を伴う X ing, Y 構文の場合を取り上げる。

### 2.3.1 「継起性」を示す X, Y ing 構文の場合

- (10) He rushed to the porch and saw nothing but the ink-black storm. Then a bolt of lightning sliced the sky, briefly illuminating the driveway. He was lying face down, a few steps from the car. (Segal : 175)

最初の文の saw という視点の所在を含意する語から明らかなように、二番目以降の文 (Then a bolt of lightning sliced ...) では、登場人物 he (Bob) の視点で支配する場面が描かれ、he がこの場面に遍在する意識の主体となっている。そして、問題の X, Y ing 構文では、一筋の稲妻がさっと空を走ると、しばらく、車道をパッと照らし出したという意識の主体である登場人物 he の目から今まさに見ている出来事が示されている。

そうすると、この X, Y ing 構文は、X に始まり Y に終わる、意識の主体である登場人物の今まさに起こっている連続した知覚行為を反映していると言えよう。<sup>10)</sup>が、主節の動詞に語り手の時制である過去時制 (sliced) が用いられている点に語り手の声が聞こえ、語り手の存在を垣間見ることができる。したがって、この場合、出来事を知覚している基点は登場人物にあり、その登場人物の視点から今まさに知覚している出来事が伝えられるが、その知覚している出来事を語っているのは、語り手であると言える。

が、次のような事例 (11) を見てみよう。

- (11) A half hour later the messenger got off his bicycle at the door of Bethel Rooms on Eye Street and climbed the long flight stairs. There was no desk, only a counter in the corner of the spacious hall. On the counter was a solitary press-down bell and a sign on the wall over the bell which said Ring. The messenger looked around, noticing the many closed doors of the small hotel. (Saroyan : 146)

ここでは、二番目の文 (There was no desk,...) から、語り手が登場人物 the messenger の視点に移入し、意識の主体となった the messenger の目から見ている出来事・事態が表されている。したがって、その延長線上にある X, Y ing 構文には、あたりを見回すと、このホテルのドアの多くが閉まっているのに気づいた、という意識の主体である登場人物 the messenger が今まさに心の中で体験している出来事が表されている。この限りでは、事例 (10) の場合と同じであるが、ここでは、意識の主体である登場人物自身を the messenger を用いて客体化している点に語り手の声が聞こえ、事例 (10) と異なって、語り手が登場人物の視点に完全に移入仕切っていないことがわかる。

### 2.3.2 懸垂分詞を伴う X ing, Y 構文の場合

- (12) Sarah passed them and went into the hotel. Mrs. Boynton, wrapped in a thick coat, was sitting in a chair, waiting to depart. Looking at her, a queer revulsion of feeling swept over Sarah. (Christie<sub>2</sub> : 63-4)

最初の文は、語り手による登場人物 Sarah の行為の客観的描写である。二番目と三番目の文では、語り手は登場人物 Sarah の視点に移入し、Sarah の視点が支配する場面が描かれている。したがって、問題の懸垂分詞 (Looking up) には、意識の主体である登場人物 Sarah が Mrs. Boynton をじっと見詰めている意識を感知でき、主節では、その見詰めている時に感情の激変が起こったことが述べられている。ここでも、登場人物の目から見たほぼ同時的に存在する二つの事態が表されていると言えよう。<sup>11)</sup>

が、主節の動詞に語り手の時制である過去時制 (swept) が用いられ、さらに、意識の主体である登場人物自身に固有名詞 (Sarah) が用いられて客観的に対象化されている点にも、語り手の存在を垣間見ることができる。したがって、この場合、語り手は登場人物の視点に完全に移入仕切っていない (意識の主体を固有名詞で指示していることからわかる) が、出来事を体験している基点が登場人物にあることには変わりなく、登場人物の視点から今まさに体験している出来事が示される。が、一方、その体験している出来事を

語っているのは、語り手である（主節の動詞が過去時制であることからわかる）と言うことができる。

### 2.3.3 「時」を示す X ing, Y 構文の場合

- (13) 'He hasn't changed at all,' he said. But watching the moment of the water against his hand he noted that it was perceptibly slower. (Hemingway<sub>1</sub> : 64)
- (14) Annie continued in a softer voice. "I'm gonna have a regular mother and father like a regular kid. I am." Hearing these words, Oliver Warbucks felt the heart break in his chest ... (Fleischer : 97)

事例 (13) と (14) では、それぞれ、語り手は登場人物 he (the old man) および登場人物 Warbucks の視点に移入し、old man および Warbucks がそれぞれの場面に遍在する意識の主体になっている。したがって、事例 (13) の場合、X ing 形式には、意識の主体である he が手にあたる水の動きをじっと見つめている意識が感じられ、Y には、そうしていると、水の動きがかなり遅くなっていることに気づいた、ということが示されている。また、事例 (14) の場合も、X ing 形式には、意識の主体である Warbucks が Annie のより穏やかな声で話していることばを耳にしている意識が感じられ、Y では、そうしていると、心が張り裂ける思いになった、ということが表されている。

そうすると、ここでの X ing, Y 構文は、知覚しているうちにある認識に至る、あるいは知覚しているうちにある心的状態に至る、という意識の主体である登場人物の今まさに進行している心の中の動きを反映している言えよう。<sup>12)</sup>が、ここでも、主節 Y に語り手の時制である過去時制の動詞 (noted・felt) を用い、さらに、事例 (13) の場合、X ing 句、主節 Y に、それぞれ、三人称代名詞 his, he を用いて登場人物自身を客体化したり、事例 (14) の場合、主節 Y に固有名詞 Oliver Warbucks を用いて登場人物自身を客体化している点に、語り手の声を聞くことができる。したがって、この場合も、語り手は登場人物の視点に十分に移入仕切っていないが、出来事を体験している基点は登場人物にあり、その登場人物の視点から体験している出来事が伝えられる。また、一方、その体験している出来事を語っているのは、語り手であると言うことができる。

### 2.4 自由間接話法の文の場合

- (15) Liking him she opened the door and looked out. It was raining harder. A

man in a rubber cape was crossing the empty square to the cafe. The cat would be around to the right. Perhaps she would go along under the eaves. (Hemingway<sub>2</sub> : 101)

- (16) He was still smiling when he walked up the rock-cut steps. In a chair on the terrace an old gentleman was sitting and the sight of him was vaguely familiar to Dr Armstrong. Where had he seen that frog-like face, that tortoise-like neck, that hunched-up attitude—yes, and those pale, shrewd little eyes? Of course—old Wargrave. (Christie<sub>3</sub> : 29)

事例(15)の場合、二番目以降の文 (It was raining harder...) では、視点の所在を含意する looked out から明らかなように、登場人物 she の視点が支配する場面が描かれている。ここでの自由間接話法の文では、登場人物 she の意識の対象が、先行する二つの進行形によって示されている眼前の出来事から、突如、the cat に移行し、「the cat は、この右を行けば、あの辺りに居るだろう」とか「軒下に沿って行けばそこに行けるだろう」と、the cat の居場所、それからそこに行き着く方法について思いをめぐらしている意識が示されている。

事例(16)の場合、最初の文では、語り手により、登場人物 he (Dr Armstrong) の客観的描写が行われている。そして、二番目以降の文 (In a chair on the terrace...) では、語り手は登場人物 he の視点に移入し、he の視点が支配する場面が描かれている。問題の自由間接話法の文では、意識の主体である登場人物 he がテラスに座っている老紳士に見覚えがあり、「誰だっただろうか」と、その老人の顔、首、態度を順次見ながら推理し、最後に目を見て、「old Wargrave だ」と思い付いた一連の思考している意識の流れが表されている。

そうすると、自由間接話法の文は、意識の主体である登場人物が今まさに思考している意識を反映するものであると言えるが、事例(15)と(16)の場合、それぞれ、登場人物自身を指示する場合、三人称代名詞 she, he を用いて客体化している点や、過去時制 (would) とか過去完了時制 (had seen) という語り手の時制が用いられている点に、語り手の声を聞くことができる。したがって、この場合、ある事柄を思考している基点は登場人物にある (語り手は登場人物の視点に完全に移入仕切っていないが) が、その思考内容を語っているのは、語り手であると言うことができる。

## 2.5 まとめ

以上のように、ここで取り上げた言語形式が生起する場面では、語り手は登場人物の視点に移入して、自らは姿を消し、その登場人物が問題の場面に遍在する意識の主体となる。

その結果、これらの言語形式は、意識の主体である登場人物の目から見たあるいは登場人物の意識が支配する出来事・事態を示すことになる。一方では、これらの言語形式の動詞には、語り手の時制である単純過去時制が用いられている点に語り手の声が聞こえ、語り手の存在を感知することができる。したがって、これまで見てきた言語形式は、意識の主体である登場人物の目から見たあるいは登場人物の意識の支配する出来事を示すが、一方では、それらの出来事は、語り手により発話時から見た過去の出来事として物語られたものであると言えよう。が、語り手が登場人物の視点に移入すると言っても、完全に移入している場合と完全に移入仕切っていない場合が見られ、前者の場合、統語上、意識の主体である登場人物自身を指示する三人称代名詞あるいは固有名詞は消去されるが、後者の場合、その三人称代名詞あるいは固有名詞は消去されず残る。このように、三人称代名詞あるいは固有名詞が用いられるということは、動詞が単純過去時制であるという以外に、さらに、登場人物を客観的に対象化している語り手の存在を感知することができ、このような三人称表現を含む場合の方が、そうでない場合よりも語り手の媒介性の度合のより高いものとなっていることがわかる。

ここで、語り手が登場人物の視点に完全に移入している場合の言語形式と、完全に移入仕切っておらず、語り手の媒介性の度合のより高い言語形式とを整理してみると、次のようになる。

(A) 語り手が登場人物の視点に完全に移入している場合

- ① 進行形を含む文 [2.1の(5)・(6)]
- ② 倒置構文 [2.2の(8)・(9)]
- ③ 「継起性」を示す X, Y ing 構文 [2.3.1の(10)]

(B) 語り手が登場人物の視点に完全に移入仕切っていない場合

- ① 進行形を含む文 [2.1の(7)]
- ② 「継起性」を示す X, Y ing 構文 [2.3.1の(11)]
- ③ 懸垂分詞を伴う X ing, Y 構文 [2.3.2の(12)]
- ④ 「時」を示す X ing, Y 構文 [2.3.3の(13)・(14)]
- ⑤ 自由間接話法の文 [2.3.4の(15)・(16)]

そうすると、これらの言語形式は、語り手の媒介性の度合の違いが若干見られるものの、概ね、登場人物が（彼の現在から）知覚している・体験している・思考している出来事を、語り手が（発話時から見た過去の出来事として）語っているものを表している表現形式であると言える。



### 3 結語

物語談話に見られる表現形式には、語り手の物語る声しか聞こえない表現形式から、厳密な意味でのミメシス（pure mimesis）<sup>13)</sup>としての表現形式に至るまで、様々な伝達様式による物語の提示方法が考えられ、一種の連続体を形成していると想定すると、ここで取り上げた言語形式は、その中間的段階に属する表現形式、つまり、出来事を今まさに知覚・体験している登場人物（意識の主体）の視点の存在を感知でき、さらに、語り手の物語る声も聞える、登場人物の視点と語り手の物語る声が並存した表現形式であると言える。また、この中間段階に属する表現形式の中にも、さらに、語り手が登場人物の視点に移入している度合により、いくつかの下位段階が見られる（これは、統語上、時制の種類・三人称表現の有無により裏付けられる）。

Eto (1989) は、西欧の物語の基本的約束事について、次のように論じている。

西欧の物語においては、物語の語り手は、発話を行う登場人物を三人称に置き、物語の時制を過去に置いて、テキストの外部に設けられた一つの定点に視点を取りつつ物語を語る。すなわち、視点も発話点も一貫して固定されたままで、物語のテキストは過去に起った事柄をよく整理して再現したものとして作成されている。

しかしながら、この論述に従うと、視点も発話点もテキスト外の一つの定点に固定されたままなので、語り手は、登場人物の視点に移入することができないし、また、物語の出来事は、常に、語り手が発話時から見た過去のものとして表現されることになる。が、現実の複雑な要素が様々な形で錯綜し合っている物語テキストを観察するとすぐわかるように、この物語の基本的約束事を逸脱しているいくつかの傾向が見られる。本稿で取り上げてきた言語形式の伝達様式は、その逸脱している傾向の一つに相当し、Eto (1989) 流に言えば、発話点は一貫して固定されたままでなければならないという約束事は守られているが、視点に関する約束事の方は守られず、語り手が登場人物の視点に移入していく場合となる。<sup>14)</sup>この視点と物語る声が並存する表現形式は、可能な限りミメシスとしての表現形式に近づこうと努力するが、Eto (1989) で指摘されているような三人称・過去時制という枠組みの強力な制約を受けるため、どうしてもその枠組みから抜け出ることができず、その客観性を依然保持し続けている場合で、英語における三人称物語の一つの典型的特徴を形成していると共にその限界を端的に示すものであると言える。

## 注

- 1) 以下、問題の言語形式の部分には、アンダーラインを引いて示すことにする。
- 2) 拙稿（1989 a）では、視点と物語る声の概念を用いて、「NP + V ing」句とその対立的言語形式との伝達様式および表現効果の差異を示した。また、拙稿（1989 b）では、両概念を用いて、A and B 構文と A, B ing 構文の伝達様式上の差異および表現効果を明らかにした。
- 3) 視点とは、出来事を知覚する観点ばかりでなく、出来事を体験する点など出来事を促える基点を意味し、物語る声とは、出来事を読者に伝達する媒体としての語り手の声を意味する。
- 4) ここでの具体例は、ほとんどが、これまでの著者の論文において既に取り上げられたものである。が、それらは、物語談話の言語形式の機能分析を行っていく上での二つの重要な側面のうちの一つ、つまり、当該の言語形式によって表される出来事が誰の視点から見ているものであるかという側面からのミスポットライトを当てられたもので、もう一つの、その言語形式によって示される出来事を語っているものは誰かという側面は、考慮の外に置かれていた。そこで、出来事を見ているものは誰か、出来事を語っているものは誰かという両方の側面を考慮に入れて、それらの具体例を再検討してみると、以下で見るような、英語の三人称物語において一つの典型的特徴を形成する表現形式グループを抽出することができる。
- 5) 詳細については、拙稿（1982）を参照。
- 6) 語り手が物語る発話時は、読者により、物語られる出来事よりも後のものとして理解される。つまり、物語られる出来事は、物語る声よりも過去のもので、過去の文法的形態が保持されるのである。物語られる出来事は、どんなものであれ、語り手の発話時（現在）から見れば、過ぎ去った過去のもので、回顧的視点を取る。Ricoeur（1988）・Leech（1987）を参照。
- 7) 詳細については、拙稿（1982）を参照。
- 8) 尚、ここでの -ing 形式（jabbering about ...）では、乗務員のしゃべっていることにじっと耳を傾けている様子が描かれている。この倒置構文の後の -ing 形式の機能については、拙稿（1985）を参照。
- 9) 詳細については、拙稿（1986）を参照。
- 10) 詳細については、拙稿（1989 b）を参照。
- 11) 詳細については、拙稿（1987）を参照。
- 12) 詳細については、拙稿（1984）を参照。
- 13) ミメシスとしての表現形式は、本来、対話（dialogue）によってしか実現されないとする説もある（Stanzel（1984：65）；Mimesis, in the strict sense of direct or dramalike presentation, is possible in the novel actually only by means of dialogue）が、さらに、拡大して、思考を speech として扱い、対話とこの言語化された思考、両者をミメシスとしての表現形式とする説もある（Chatman（1975：237）；the absolutely unmediated story or pure transcript or record, consists of nothing beyond the speech or verbalized thoughts of characters）。そこで、これらの諸説を勘案して、本稿では、ミメシスとしての表現形式とは、一人称物語であれ、三人称物語であれ、語り手による媒介性がなく、その場面に遍在している意識の主体である登場人物の心の中に生起している意識（思考・感情・知覚）を今まさに生起しているままに再現する、あるいは登場人物が話していることばをそのまま再現する、表現形式である、とする。

- 14) 他に、この Eto (1989) の物語の約束事を逸脱している傾向として、視点も発話点も固定されず移動する、つまり、語り手が登場人物の視点に移入して一体化すると共に発話点も登場人物のそれに移動する場合が見られる。この伝達様式とそれを反映する表現形式については、拙稿 (1990: in press) を参照。

## 参考文献

- Bal, M. 1985. *Narratology: introduction to the theory of narrative*. University of Toronto Press.
- Brinton, L. 1980. "‘Represented perception’: a study in narrative style." *Poetics* 9, 363-81.
- Chatman, S. 1975. "The structure of narrative transmission." In R. Fowler (ed.) *Style and structure in literature*, 213-57. Cornell University Press.
- . 1978. *Story and discourse: narrative structure in fiction and film*. Cornell University Press.
- Cohn, D. 1978. *Transparent minds*. Princeton University Press.
- Eto, J. (江藤淳) 1989. 「日欧文化の対称性と非対称性—美術と文学—」『文学界』1月号, 240-52. 文藝春秋.
- Fehr, B. 1938. "Substitutionary narration and description: a chapter in stylistics." *English Studies* 20, 97-107.
- Genette, G. 1980. *Narrative discourse*. (Trans. J. E. Lewin) Cornell University Press.
- . 1983. *Nouveau discours du récit*. Seuil. 和泉涼一・神郡悦子訳『物語の詩学』書肆風の薔薇, 1985.
- Hutchinson, T. 1989. "Speech presentations in fiction with reference to *The Tiger Moth* by H. E. Bates." In M. Short (ed.) *Reading, analysing and teaching literature*, 120-45. Longman.
- Leech, G. N. 1987. *Meaning and the English verb*. (2nd ed.) Longman.
- Nakayama, M. (中山真彦) 1988a. 「物語と物語文—日本語・フランス語の対比」『文学』56巻, 8号, 23-39. 岩波書店.
- . 1988b. 「日本語はフローベルをどこまで受容できるか——『蒲団』の仏語訳と『ボヴァリー夫人』の日本語訳」『文学』56巻, 12号, 205-24. 岩波書店.
- Ricœur, P. 1984. *Temps et récit*. Seuil. 久米博訳『時間と物語II—フィクション物語における時間の統合形象化』新曜社, 1988.
- Stanzel, F. K. 1984. *A theory of narrative*. (Trans. C. Goedsche) Cambridge University press.
- . *Theorie des erzählens*. Vandenhoeck & Ruprecht. 前田彰一訳『物語の構造』岩波書店. 1989.
- Toolan, M. J. 1988. *Narrative: a critical linguistic introduction*. Routledge.
- Yamaoka, M. (山岡實) 1982. 「Stative Progressive の機能的側面についての一考察」大阪市立大学大学院英文学研究会『Queries』19, 9-24.

- . 1984. 「分詞構文における Ing 形式の機能的特性とその談話機能」 大阪市立大学大学院  
英文学研究会 『Queries』 21, 23-36.
- . 1985. 「X, Y ing 構文における Y ing 形式の談話機能と表現効果について」 『相愛大  
学研究論集』 1, 119-36.
- . 1986. 「新情報・旧情報の概念に基づく談話分析への一批判」 『相愛大学研究論集』  
2, 73-87.
- . 1987. 「懸垂分詞の存在理由をめぐって——談話分析の観点から——」 『相愛大学研究  
論集』 3, 111-21.
- . 1989 a. “Point of view and narrative voice in discourse analysis of narrative —  
a case of ‘NP + V ing’ phrase — ” 『相愛大学研究論集』 5, 99-113.
- . 1989 b. 「談話における A and B 構文と A, B ing 構文」 大阪市立大学大学院英文学  
研究会 『Queries』 26, 25-35.
- . 1989 c. 「談話分析における視点と物語る声」 『英語青年』 134巻, 12号, 9.
- . 1990. (in press) 「内的独白の実現方法について——三人称物語の場合——」 大阪府立  
大学英米文学研究会 『英米文学』 38.

#### 例文の出典

Christie <sub>1</sub>	Christie, A. <i>Death on the Nile</i> . 1975. Fontana.
Christie <sub>2</sub>	Christie, A. <i>Appointment with Death</i> . 1984. Fontana.
Christie <sub>3</sub>	Christie, A. <i>And Then There Were None</i> . 1988. Fontana.
Corder	Corder, E. M. <i>The Deer Hunter</i> . 1980. Coronet.
Fleischer	Fleischer, L. <i>Annie</i> . 1982. Ballantine.
Hemingway <sub>1</sub>	Hemingway, E. <i>The Old Man and the Sea</i> . 1968. Penguin.
Hemingway <sub>2</sub>	Hemingway, E. “Cat in the Rain.” In <i>The Snows of Kilimanjaro</i> . 1970. Penguin.
Saroyan	Saroyan, W. <i>The Human Comedy</i> . 1967. Dell.
Segal	Segal, E. <i>Man, Woman and Child</i> . 1980. Granada.
Webb	Webb, C. <i>The Graduate</i> . 1979. Penguin.